

Title	韓国の神学について：モルトマンとの関わりから（共同研究報告：日韓協会交流（関係）史研究）
Author(s)	兼松，誠
Citation	聖学院大学総合研究所 Newsletter, Vol.21-No.2：17-18
URL	http://serve.seigakuin-univ.ac.jp/rep/modules/xoonips/detail.php?item_id=3139
Rights	



聖学院学術情報発信システム：SERVE

SEigakuin Repository for academic archiVE

【日韓教会交流（関係）史研究】
韓国の神学について
—モルトマンとの関わりから—

2011年6月9日、第1回日韓教会交流（関係）史研究会において、「韓国の神学について—モルトマンとの関わりから—」という表題のもとで長老会神学大学校キリスト教思想文化研究院研究員、同校非常勤講師 洛雲海（ナク・ウンヘ）氏が講演をされた。これは、氏が韓国の長老会神学大学校に提出した博士論文「モルトマン神学と韓国神学」をもとにしたものである。24名の参加があった。

韓国がキリスト教国であること、またモルトマン自身も韓国に好意的であることは周知の事柄である。氏の報告によると、このモルトマンのもとで神学博士の学位を取得した韓国人はすでに9名にのぼるという。

氏の研究は、思想的内容も政治的スタンスも異なる三つの神学、すなわち民衆神学、趙鏞基^{チョー・ヨンギ}神学、統全的神学がそれぞれの仕方でモルトマンの神学と共通点をもち、影響を受けているという事実を考察したものである。モルトマン神学の韓国神学界への受容の要因として氏が考えているのが、その実践志向的性格である。このモルトマン神学の特徴は、後に神の創造世界全体における「神の国の形成」という実践的課題へと展開されていくこ

とになる。この神学的特質ゆえにモルトマンは、民衆神学は思索と行動が一つになっている点を適切に評価できたのであり、「テオリアとプラクシスの統合」としての趙鐮基神学が潜在的に有していた統全的性格を開花させることができたのであった。三つ目の神学、つまりは李鍾聲^{イ・ジョンソン}によって提唱され、金明容^{キム・ミョンヨン}によって発展的に継承された統全的神学は、統合性（integrity）と全体性（Wholeness）の双方に重点を置いている。統全的神学は「可能な限り全ての真理」を統合し、しかも全体性（穩全性）を志向し、宇宙万物が神の救いの対象であり、その働きの方が万有の中にあるという信仰に立脚する。要するに、統全的性格、そしてさらに「神の国のための実践的神学」という性格が、韓国の神学とモルトマン神学を結び付けているのである。

氏はさらに、「人間の霊や魂を中心とする」パラダイムから「神の国を中心とする」パラダイムへの転換を企てたという点においても、両神学の共通性を確認する。その転換作業には伝統や過去と決別し、自らを変化させなければならないという痛みが伴うであろうが、真理のためにはその痛みを乗り越えようとする力と勇気がそれぞれの神学にあったことを意味している。

氏の見るところ、韓国のこれからの神学界を引っ張っていくのは統全的神学である。そして、この神学は韓国のみならず、世界においても十分通用する実力を持っているとされる。

氏によって明らかにされた韓国における神学界の成熟性は、欧米の神学思想の翻訳と輸入に終始

している日本の神学界に対して反省を迫るものとなった。会の締めくくりに述べられた大木英夫研究所所長の言葉にもそれは滲みでていたように思われる。しかし、それは同時に、日本の神学界が韓国の神学界と連携を強化していく活動の意義を再確認させてくれるものでもあった。

（文責：兼松誠 聖学院大学大学院アメリカ・ヨーロッパ文化学研究科博士後期課程）

（2011年6月9日、聖学院本部新館2階）



講演者の長老会神学大学校キリスト教思想文化研究院研究員 洛雲海氏